

文学サークルを活用した中学校国語科学習指導の開発 — 社会生活に生きる読解力の育成に向けて —

Development of a method for Japanese Language Instruction
in Junior High School by making use of Literature Circles :
Toward Developing Reading Literacy for Social Life

山 元 悦 子 武 田 祐 子

Etsuko YAMAMOTO Yuko TAKEDA

国語教育講座

(平成18年10月2日受理)

1. 本稿の目的

OECD（経済協力開発機構）によって2003年に実施された「生徒の学習到達度調査」（PISA:Programme for International Student Assessment）の結果をうけ、我が国では、現在読解力の見直しが始まっている。この調査で測られた読解リテラシー（以後これをPISA型読解力と称する）は、これからの社会生活を送る上で必要な知識や技能の習得状況を測定するために行われ、そこで調査された「読解リテラシー」は、我が国で伝統的に育ててきた読解力と異なるものであった。そのため、この調査の結果は、我々に新たな「読解力」のありかたの問い直しを迫ってきたのである。

この調査において読解力は、「自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するために、書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する能力」^{*1}と定義されている。ここでは、読解力は個人が生涯にわたって仲間や自分がその一員である地域社会の人々とよりよい社会を作る営みに参加するために、テキストから知識を獲得したり、テキストを利用したり、そこから新しい考えや判断を産み出したりする、目的を持った能動的な方略的（ストラテジー）能力として捉えられているといえよう。

ところが、我が国では、読解力は一般的に文字で書かれた文章の内容を理解する能力と受けとめられている。「読解」という用語は、昭和31年『読解指導』（倉澤栄吉 朝倉書店）の発刊を一つの契機として広く流布しはじめ、＜読解指導＞とは、「文章の意味内容を、語句の解釈、段落や場面相互の関係の解明、主題や要旨の把握などを通して明らかにしていく指導」^{*2}と解説されている概念であった。

また、これまでの国語教育では、国語科の教育内容は教材の分析を出発点に導き出されてきた伝統がある。そのため、読解力は、主体である生徒の側からではなく、対象である書かれた文章の構造（語句・文・文章）にそって設定され、結果として読解力は、書かれた内容をまず正確に理解することを出発点にした受容的読み解き過程という色合いの強いものとなったのである。

この国語教育界の考え方に対して、PISA型読解力の概念が揺さぶりをかけたのは、目

的をもってテキストを解釈し、必要な情報を取り出したり、批判的に検討を加えたりする、子どもの側の主体的な活動（表現活動も含んだ活動）としての読解活動をクローズアップさせたという点にある。

この新たな視点の提示を受けて、我々は、これから時代を担う子どもたちにどのような読解力を身につけさせるべきか。そしてその読解力はどのような学習活動によって育て得るのだろうか。本稿では、この点について、読解力のとらえ方について試案を示し、具体的な実践形態によってその読解力の育成の方法を提案することを目的としている。

2. 「読解力」の構造

文部科学省は、『読解力向上に関する指導資料～PISA調査（読解力）結果分析と改善の方向～』（平成17年12月）を公刊し、その中で「読解力を高める指導例（1）指導のねらい」として、次の7項目をあげている。この項目は、いわゆるPISA型読解力をより具体化された姿として示したものといっていよいであろう。

ア テキストを理解・評価しながら読む力を高めること

（ア） 目的に応じて理解し、解釈する能力の育成

（イ） 評価しながら読む能力の育成

（ウ） 課題に即応した読む能力の育成

イ テキストに基づいて自分の考えを書く力を高めること

（ア） テキストを利用して自分の考えを表現する能力の育成

（イ） 日常的・実用的な言語活動に生かす能力の育成

ウ 様々な文章や資料を読む機会や、自分の意見を述べたり書いたりする機会を充実すること

（ア） 多様なテキストに対応した読む能力の育成

（イ） 自分の感じたことや考えたことを簡潔に表現する能力の育成

横浜国立大学教育人間科学部附属横浜中学校では、このPISA型読解力に示唆を受け、「読解力」を「Ⅰ受信・受容：聞くこと、読むこと Ⅱ思考・判断・創造：考えること、思うこと Ⅲ発信・提示：話すこと、書くこと」の3要素の総体として提案している。³

この2つの提案に通底する理念であり、今日的に価値があると思われる側面には、次のような点があるのではなかろうか。

- ・「読解力」を、人間の一連の＜目的を持った・主体的な言語行為（プロセス）＞の側面から捉えること
- ・言葉にすることによってはじめて対象が把握されることを考えると、テキストから読み取ったものを他者に向けて言葉化し、表現する段階まで併せて「読解力」の範疇に入れることも必要ではないか
- ・社会で活用できる実践的行動力の一助として「読解力」を位置づけること

今後、国語科教育で育成すべき「読解力」を規定する際には、我が国の伝統的「読解指導」が開拓してきたものを生かしながら、この理念の受け入れるべき側面を検討し、新しい「読解力」概念を共通に構築していくことがまず必要ではないだろうか。

3. 読解力の具体化を目指して

これから求められる読解力の基本理念を以上のようなものとして提案したが、これを更に具体的なものにするために、次に、我々がテキストを前にしてどのような読解活動を営むかについての内省から、これを4つのタイプに分けて整理した。また、社会生活に生きる（活用される）読解力を育てることをねらい、読解の対象を文学だけではなく、説明的文章や非連続テキスト（広告・図表・映像・写真等）なども念頭に置いて規定している。ただし本稿では実践の焦点を文学テキストに当てているので、例として示したものはそのうちの文学テキストの読解活動を念頭に置いて記している。

この試案の特徴は、読解力を次のような面から規定している点にある。

- テキスト内の情報操作（正しく読み取る・関係づけて読み取る・意味をまとめてみる）を出発点にするものの、読み取った内容を経験と照らし合わせながら吟味し、自分にとってのテキストの意味を構築するプロセスに注目している点
- テキストの表現方法の効果や問題点について注意を促す読みかたに注目している点
- 読んだ内容を再構成したり、自分が解釈・批評したことを他者に向けて言表化する段階段階までを視野に入れて規定している点。

A 目的に応じて必要な情報を取り出すタイプの読解力	
1 必要な情報を取り出す	例 場面設定（いつ・どこで）をつかむ 登場人物とその立場（役割）をつかむ
2 関係づけて情報を捉える	例 人物相互の関係を捉える 人物の変化（成長）や状況による心情の変化、人物と状況の関係を捉える
3 全体を統覚して意味づける	例 テキストの構造（場面の展開）を捉える 人物を典型として捉える 題名の意味を捉える 主題を考える
B 情報提示（表現方法）の効果を考えるタイプの読解力	
1 ことばからイメージを広げる	例 色彩表現 比喩表現 題名の言葉から内容を想像する
2 テキストの表現上の特徴に気付く	例 構成・表現（文体・描写等）上の特徴をつかむ
3 テキストの説得力を分析する	例 作品世界にリアリティをもたらしたり、読者を引き込む「しかけ」をつかむ
C 情報を再構成するタイプの読解力	
1 観点ごとに内容を取り出し整理する	例 人物像（性格・心情）を整理する
2 情報を図表に構造化して整理する	例 心情曲線・人物関係図を書く
3 推論しながら情報相互を関係づける	例 なぜこの人物はこのような行動を取ったのか意味づけ、説明する
4 いろいろな媒体に情報を組み替える	例 登場人物になって日記を書く 劇台本にする 新聞・プレゼンテーション資料にする
5 相手に向けて情報から得た自分の見解を説明する（話で・文章で）	例 本の紹介ブックトーク 感想を書く

D 情報を吟味・分析するタイプの読解力	
1 情報を自分の知識や経験と結びつけて判断する（評価する）	例 自分だったら…と考えながら読む
2 情報について自分の見解を持つ	例 登場人物の行動の理由や心情について様々な視点から捉え意味づけてみる
3 情報について批判的検討を加える	例 テキストの文章の美しさを鑑賞・批評する 場面の展開や表現等について効果や不十分な点について考える
4 筆者がこのテキストを書いたねらいを考える	例 作家の生涯や他の作品と重ねて読む

4. 教材の側からの発想で行われてきた授業の問題点－文学の授業の場合－

さて、以上のような枠組みで「読解力」を捉え、今日の中学校における国語科でこのような読解力をつける授業を構想するとしたら、それはどのようなものになるのだろうか。それを考える前提として、まず、現実の中学校における国語科の授業の実態を指摘してみたい。論者と今回の研究実践を協同で作った実践家武田祐子教諭（実践経験22年）との協議の中で、中学校における文学教材を扱った実践の一般的な状況と問題点は、次のように確認された。

- (1) 文学の詳細な読解を行う授業が好ましくないと言われているが、ではそれに変わる授業とはどのようなものなのかの見通しが持てないでいる。
- (2) 国語の授業時間が減少したため、ワークシートを使って教材の内容を効率よく理解させることに終始している。ワークシート上は教材の内容を整理できたがそれでどのような読み方を教えたのか、どのような読解力をつけたのかが意識されて教えられていない。
- (3) 「文学の授業において生徒が読みを交流しあう」ことの意義も近年言われている。教師にも生徒主体の読みの交流を主体とする授業を展開していこうとする意識はあるものの実態としては生徒のおおのの考えの出し合いに終わり、そこから深めていくことが難しい。
- (4) 文学を読むことが生徒の生涯にわたる生活に資する資質や能力を育てることと乖離しており、教室での閉じた学力となっている。

そこで本稿では、このような問題点に対して次のような方針を持って改善を図ることとした。

・改善の指針

- (1) 文学の授業において、詳細な読解によって内容を丁寧に正確に捉えたり、扱う作品の内容的な価値にせまることは大切だが、読解力をつけるためには内容を正確に捉えるところにとどまらず、様々なスタイルの「読解の方法」を身につけ、またそれを自覚的に活用できる力を育てる。
- (2) その授業を通してどのような「読解の方法」（文学の読み方・味わい方）を教えたのかがはっきりわかる授業を目指す。
- (3) 生徒相互の読みの交流が深まるには、読み方の学習と共に、ディスカッションスキルを高める学習が必要である。この二つは車の両輪のように補完し合って効果を発揮する

ので、双方を相互補完的に組織した単元構成を仕組む。

- (4) 教室で文学を読む営みを生徒の生涯にわたる生活に資する営みにつなげるため、文学を読むことを通して他者と考えを伝え合い、つながっていく楽しさを味わわせ、それによって自分が豊かになることを体験させたい。そのために、授業では友だちと意見を交わし合う学習形態を尊重し、また、授業で学んだことが生徒の社会生活での読む生活に生きる（活用される）ように働きかける。

このような改善の指針を元に実施した実践の報告を行うが、その前に実践の基盤となっている「文学サークル」の理念および手法について述べていきたい。

5. 文学サークルの理念を取り入れた読みの授業の構想

5.1 文学サークルとは何か

リテラチャーサークル (Literature Circles) とは、Daniels, Harvey. 『Literature Circles』 (2002) 等によって提案されたディスカッショングループによる読書活動実践である。^{*4}「文学サークル」については、山元隆春 (2003) が、読者反応理論に基づく読むことの授業実践のあり方に示唆を与えるものとして我が国に紹介している。^{*5}また、足立幸子 (2004)^{*6}においては「文学サークル」は読書指導の一方法とされ、主に読書活動中に焦点を当てて指導しうる点を評価している。氏によると、文学サークル活動は、近年の読者反応理論や協同学習理論を反映したものであり、構成主義と子供主導の考え方にたった指導のあり方であると位置づけられている。「文学サークル」の活動は読書行為をトータルで捉え、読書行為中の思考過程を指導しうる点に意義が見いだされているのである。本実践研究では、Jeni Pollack Day. 『Moving Forward with Literature Circles』 (2002) (『リテラチャーサークルとともに前進する』)^{*7}を手掛かりに、リテラチャーサークルの理念や手法を捉えている。それによると、リテラチャーサークルとは、一つのテキストについて生徒達が3, 4人のグループとなり共に語り合う学習活動である。そこでは、「登場人物や出来事、テキストと関連する個人的経験、作者の工夫に関する気付きなど」に焦点化されたディスカッションが行われ、「生徒達がおのおのの意見を分かち合い、そこで行われた各自の読書経験を内省するにつれて一人一人のテキスト理解の手法が洗練されていく」ことがねらわれている。この学習方法では、生徒にある特定の課題について考えさせるために教師が質問をするような伝統的な手法と異なり、生徒達に自発的に質問を作らせ、生徒達がお互いに助け合ってそれに答えていくという場 (サークル) が提供される。

Daniels, Harvey. 『Literature Circles』では、サークルのメンバーはそれぞれに役割を持ち、役割シートに課題を書き込んでからディスカッションに臨む。この文学サークルの概要は足立 (2004) によって次のように整理されている。

- < 1 子どもたちは授業中に教師から紹介された本の中から、自分の読みたい本を選ぶ。同じ本を選んだ子供同士がグループを結成する。／ 2 グループで読むペースを決定し、それぞれが自分の役割に応じてその部分を一人で読む。これが3の準備となる。／ 一人読みの成果を持ち寄り、グループで自分がどのように読んできたかを披露したり、話し合いたいことを話し合ったりする。／ 2 および 3 を繰り返してグループで1冊を読みきる。役割は毎回変更され、評価はその都度教師の観察評価と子供の自己評

価で行う。／1冊読み終わったらそのグループは解散する。次回はまた読みたい本によって新しいグループを作る。>

5.2 なぜ文学サークルの形態を取るのか

このような役割を分担して仲間で読み合う形態を取ることは次のような点にある。

- ①生徒がそれぞれの役割による特定の観点からの「解釈」を持っており、違う角度から共通の話題（課題）に取り組むので多様な意見が生まれる。しかもその共通の話題は同じサークル仲間から出されたものなので、この人に対して自分の考えを話して納得してもらうのだというシチュエーションが生まれ、解決に向けての必要感が生まれる。
- ②サークルのメンバーは継続して学習する。そのため、サークルのディスカッションがうまく運営されれば、コミュニケーションの質の高まりを通して生徒一人ひとりの個性が生かされあって成長していくことができる。
- ③最終的には、自分たちが選んだ書物を自分たちで読み味わうような自立した読書生活を協同で営める生徒へと成長させることができる。

「文学サークル」では、グループの構成メンバーは役割を持ってテキストを一人読みし、それを持って集い、話し合いが始まる。本実践研究ではこの手法を活用して、以下のような役割を作り、グループ構成員が一人一役を担当して、その立場からテキストを読んでおいてディスカッションに取り組むこととした。

- ・話題提供者－ディスカッションで協同して読み解くべき話題をいくつか用意する。
- ・進行役－話題提供者の意図を汲取り、全員が快く意見が出せるような場を作る。
- ・言葉担当－作品を読み解く手がかりとなるキーワード、場面などを考え、各係の子供から出される意見を作品の表現の面から裏付けたり補強したり別の意見を出したりする。
- ・セールスマン－自分たちが読んでいる作品をを書店で売るためのキャッチコピー作りに向けて、作品の特徴を考え、コピーの表現の原案を考える。
- ・批評家－作家の別の作品や、同テーマの作家の作品について紹介したり、作品全体を俯瞰して批評したり、意味づけたりする。

5.3 文学サークルを行う上での方法論上のポイント

文学サークルの形態を取って実践する場合、次のような点に留意することが必要である。

- ①文学サークルという学習形態とそのような形態を取る意義について生徒が理解して臨んでいること。
- ②読解スキルとディスカッションスキルの学習と連動させながら、サークル学習をくりかえして行うこと。効果的な話し合いのしかたを同時に学ぶことで生徒たち自身で読み深めていく力をつける。
- ③文学サークルの前に各自の担当する役割分担シートをあらかじめ書き込む時間を取り、ひとりでじっくり作品と向き合う時間を保障すること。この間教師は生徒の能力の差に応じた指導と、生徒たちが行う後の話し合いが意味あるものになるような耕しを行っておく。
- ④文学サークルを生徒たち自身が進める時、生徒達だけでは解決できない事態が生じることはよくある。その際には教師に援助を求めることを約束事としておく。
- ⑤サークルの学習活動を日誌につけることによって、サークルの成長や問題状況を生徒に意識化させる。この日誌は進行役の生徒によって教師に手渡される。教師は日誌の内容

をめぐって進行役の生徒との会話を行い、課題となっている点をつかむ。それによって次に取り出して学習させなければならないディスカッションスキルや読解スキルを発見する。

- ⑥生徒に学習ファイルを持たせ、スキルを蓄積させることで、次に行う文学サークルで獲得したスキルを自分で使いこなす手掛かりを形にしておく。

5.4 「文学サークル」から「読書サークルへ」

生徒の生涯にわたって資する読解力を育てる視点から、テキストを文学に限定せず、さまざまなテキスト（科学的読みもの、新聞、広告、キャッチコピー等）に対して適用できる読解力を育てることをねらいたい。そのためアメリカの先行実践では「文学サークル」という用語が用いられているが、本研究では「**読書サークル**」と称することにする。

6. 読書サークル実践の実際 単元「本の魅力を伝える広告テキストを作ろう」

6.1 単元の構想 —社会生活に生きる読解力を育てるための単元—

以下に示す読書サークルを活用した研究実践は、前節で規定した読解力を育てることを目指し、先に示した文学の授業を改善するための4つの指針を踏まえて構想している。

ここで、先の4つの指針を実際の学習活動としてどう具体化したかを説明したい。

- (1) 「読解の方法」を取り出して意図的に学習する「読解ストラテジーレッスン」を行う。
(指針1.2に対応)
- (2) 学んだ「読解の方法」が生徒により自覚できるように、読解ストラテジーレッスンを行う時には学習の締めくくりに方法論をポイントとして明示する。
学習活動としては生徒の個人学習を経た協同学びの中で発見させていくプロセスをとるが、そのプロセスの中で生徒が発見できないものについては教師が積極的に提示していく。(指針1.2に対応)
- (3) 生徒が考えを交流しあう中で相互作用が生じ、新たな発見が生まれていくプロセスを実現するために、グループの話し合いの前にディスカッションスキルを高める学習を行う。その際の学習材は次から行われる学習活動で想定される生徒のやりとりをシナリオ化したものや、生徒の実際の話し合いの様子を録画したものを用い、実際の学習活動によりストレートに活用できるスキルに気付かせる。(指針3に対応)
- (4) 教室で文学を読む営みを生徒の生涯にわたる生活に資する営みにつなげるため、自分の解釈を伝えあうことを通してお互いの考えが深まっていく楽しさを体験させたい。そのために、仲間を固定した読書サークル(5人グループ)を作り、構成メンバーによる自主的な、課題に関するディスカッション活動を行う形態をとる。
また、自分たちが読解ストラテジーレッスンで学んだ読解の方法を使って実際のテキスト(星新一のショートショート)を読み深める学習を行うが、そのゴールに読解ストラテジーを使って発見した作品の良さを表現する(書店に展示する広告テキストを作る)活動を仕組む。このことは、教室で学んだ読解ストラテジーを自らの生活で活用する体験となるよう意識してのことである。(指針4に対応)

6.2 単元の目標

「コミュニケーションスキル学習」「読解ストラテジー学習」を通して学習したコミュニケーションスキル」や「読解ストラテジー」を活用して作品を協同で読み深め、広告テキストに表すことができる。

6.3 単元の展開

実施場所：福岡教育大学附属福岡中学校3年1，2，3組

実施時期：2006年5月30日から7月13日

実施者：武田祐子教諭

単元展開のあらまし：実生活で活用できる読解ストラテジーを指導するために、実生活での読書とつながり、しかも分析的に作品を見つめる場となりうる機会として、書店にあるつり広告やポップのキャッチコピーや文章を作るという活動を選んだ。書店に並ぶつり広告やポップは、本の帯に書かれたキャッチコピーと異なり、それぞれの書店の店員が手書きで思いを綴ったパーソナルなぬくもりのあるところから、買い手の注目を集める有効な方法として今一種のブームとなっている観がある。このつり広告やポップに書く文章をを考えるとこの活動は、売るといふ目的と、相手（買い手）がはっきりしており、相手と目的を意識して自分が作品から読みとったものを効果的に表現する場として適している。また、生徒たちが作ったつり広告やポップ（以下広告テキストと総称する）がいいものであれば実際の書店に並べましようという、ある書店の店長からの申し出があり、このことが学習を実生活につながるものにする上で、また生徒に学習への意欲を持たせる上で有効に働いた。このような場の設定と学習への意欲付けをスタートに単元は始まった。

分析の対象としたテキストは星新一のショートショート集『ぼっこちゃん』（新潮社）である。ショートショート集は、短時間で読め、8グループ（3クラスで24グループ）に別のテキストを提供することも容易である。また、文章にテンポがあり、構成面では落ちや展開に意外性がある、工夫されたものが多く、内容面でも人間の心理をついたもの、暗示的なものや文明批判など多彩なものが提供できる。このような面から多様な読解ストラテジーを適用して読むことができるテキストと判断して選んだ。

このようにして、自分たちのグループが選んだショートショート作品を推薦する広告テキストを作るために、作品を分析する目を育てようという働きかけのもとに「読解ストラテジー」を学習する時間が始まった。また、併せてグループでの話し合いをスムーズに行うための「ディスカッションの指針を作る」学習も同時にスタートした。以下に学習の展開を示す。

次	時	段階・形態	単元展開	学習材
1	1	意欲づけ・学習計画を立てる（一斉）	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 0 auto;"> 広告テキストのモデルを示し、単元の内容と計画，ゴールを示 </div>	書店のつり広告・ポップ・ワークシート
2	2	ショートofスキル学習（一斉・個人・グループ）	<div style="display: flex; justify-content: space-between; align-items: center;"> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 50%; padding: 10px; text-align: center;"> コミュニケーションスキル学習 </div> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px;">読解ストラテジー学習</div> </div>	ビデオ
	3		<div style="border: 1px solid black; border-radius: 50%; padding: 10px; text-align: center;"> よりよいディスカッションの指針を作ろう </div>	
	3		① タイトルの工夫を読み取ろう	ワークシート
	4		② 関係づけて意味を作ろう	ワークシート
	5		③ 体験に照らして意味づけよう	ワークシート
	6		④ 落ちの効果について考えよう	ワークシート
	7		⑤ 文体の特徴から表現効果を見抜こう	ワークシート
3	8	一斉	読書サークルの進め方について理解する	ビデオ
	9	グループ	読書サークル① サークルで読む作品を話し合って決める	テキスト・ワークシート
課外		個人	読書サークル 役割分担シートを書く	ワークシート
	10	グループ	読書サークル② 話題提供者の出した話題に沿って読み合う	テキスト・ワークシート
	11	グループ	読書サークル③ 作品のセールスポイントをことばで端的に表す	テキスト・ワークシート
4	12	グループ 課外	広告テキストを作り上げる	

第1次 単元への意欲付け

生徒に学習の目的や流れを理解させるために、学習の流れ図をワークシートにしたものを配布した。このときに意欲付けとして用意した手だては次のようなものであった。

- ・書店の店主に認められるレベルのものであれば実際に書店に置かせてもらえる約束をしていることを知らせる。
- ・一人一冊ずつテキストをもたせる。(学校の教科予算で購入)
- ・書店の写真や実際の広告テキストを例示
- ・読書サークルをイメージするためのモデルVTRを視聴する(第3次)

第2次 コミュニケーションスキル学習・読解ストラテジー学習

1. コミュニケーションスキル学習 ー第2次第1時ー

コミュニケーションスキル学習は、後に行う5人グループで構成される読書サークルでのディスカッションを生産的なものにするため、グループの約束事を取り決めたり、生徒の協同する姿勢を促したり、ディスカッション技能を育てる学習である。しかし、このようなコミュニケーションスキルは、一般論としてのハウツー的な方法論を授けたり、もっともな精神論(例えば、協力して話し合おう)を投げかけても効果が薄いものである。グループでのディスカッションにおいては、生徒それぞれの気質や能力の違い、人間関係のありようがディスカッションの内容に如実に反映されてくる。そこで、このコミュニケーションスキル学習に関しては、生徒の実際のグループ内でその場で生じた問題状況がリアルな学習材となって提供されることが実効性のある学習となる要件と考えた。また、個人の気質や能力の違いを認め合い、生かしていく姿勢をお互いに持たせることを重視した。授業の実際の模様を武田教諭が記録した日誌によって授業の実際を提示しておきたい。

◇ エピソード1:「どのような話し合いがよいのか」を学級の実態に合わせて考える場面

しかし、ここで問題があった。それはいつもの(国語や学級活動などで)限られたメンバー5~6人だけが発表しており、他のものは黙って聞いている、または関心をもたずに座っている(聴いてではない)という学級の姿であった。そこでこの学級での話し合いについて考えさせた。「まとまった話ばかりでなくていいから、意見を言うべき」や「みんな自信がある簡単な問いには意見を言うけど、答えがなかなかでない国語のような教科は黙ってしまう。でも答えが決まってないからこそ、自分の考えを自信を持っていえるのではないか」や「話役と聞き役の二つが学級にはある。だれもがどちらかの立場をとるのだから、その立場の人のことを察して話をしたり聴くべき。とくに聴く側の態度が重要」等があげられた。授業後、教師と生徒との談話の中で、最後に発表した女子生徒Nに感想を聞いた。「発表してよかった」とうれしそうに答えていた。また発言のなかった隣の生徒Oに「今度、また発言できるチャンスがあったらどう。」と尋ねると「答えたい」といった上で「(女子生徒と)同じだったからいえなかった。」と残念がってつぶやいていた。そこで女子生徒Nに、「○○さんと同じ意見です。っていわれたらどんな気持ちがする？」と尋ねた「うれしいです。自分の意見が認められたって感じで」と答えた顔を見ながら、教師が「うれしいんだってよ」というと、生徒Oは「そうか。わたしもしそうならうれしいものね」と答え「『同じです』っていうのもありなんですね。」と確認するように話していた。

コミュニケーションスキル学習は、あらかじめ用意した内容を順次教える構えではなく、教室の中で、あるいはグループの中で生じた状況を取り上げ、生徒に投げかけて考えさせる構えでその指導を行っていったのである。その中で例えば次のような状況が展開した。

◇ エピソード2:シナリオ台本を用いた学習の中での出来事

意見交流では、きちんとした言葉にならなくても意見を言える、聞けるクラスや、もし賛成でき

なくてもその理由を相手の立場を意識して述べるや話に割り込まないなどの意見が出た。そこで、教師が課題を含んだシナリオを配布し、少し大げさな実演を交えながらその様子を再現し、気付いたことを生徒に書き込ませた。机間指導の時、あるドラマが生まれた。それは、いつも自分勝手な発言や、興味のない相手の話を聞かない男子Sの姿であった。考え込んでなかなか進まないの声をかけると、「なかなか書けないですよ。だって（割り込みやぼんやりさん）は自分だもの。」とつぶやいた。その様子を聴いていたクラス全員は、一瞬意外な顔をしたが、本人が気付いていたこと、それをよくは思っていなかったことなどを確認でき、「いいよ。気をつければ」や「結構ある（自分も）」などの意見を述べていた。他の生徒たちは、割り込みや、聞き手側の態度、司会の手際の悪さなど、気づいたことを楽しそうに書き込んでいた。その後、どんな問題点があるのかを、意見交流させた。付け加えの意見やその場の様子を日頃の話し合いと結びつける生徒が多かった。妨げる言動である割り込みやぼんやりさん、とびきりの無礼者など、それぞれの課題やそれを行う役にネーミングをつけながら、楽しく考えることができた。クラス全体が和やかな雰囲気であった。

このような指導方針で指導していったコミュニケーションスキルは生徒の中でどのように受け止められていったのか。単元終了時に実施したアンケートより一例を示したい。<コミュニケーションスキルアップは話し合いについての自分の意見を見直すいい機会だった。また、グループで困ったときも「ディスカッションの指針」でやったシナリオでの改善策を参考にして「こういうときには、どうすればいい？」とみんなでわいわい話し合った。自分たちでたくさん意見を出し合う話し合いの仕方が大切だとよくわかった。>

コミュニケーションスキルの学習内容は、生徒達の実態から、生徒自身が「よいディスカッションにするためには、どんなスキルが必要なのか」ということを考え合う中で立ち上がってくるものの方が実効性がある。もちろん教師には教えた内容はあるものの、それが生徒達に納得され、胸に落ちる形で獲得されていく形での提示を心がけているのである。

2. 読解ストラテジーの学習

読解ストラテジーの学習は、5回5種類の読解ストラテジーについて行った。（ ）に、先に示した読解力リストとの対応関係を示しておく。

・第1回 「タイトルの工夫を読み取ろう」—第2次第3時—（A-3）

学習目標は、①タイトルに込められた筆者の意図を読み取る②タイトルの効果について自分の考えが説明できるとした。学習材として「走れメロス」を使用した。これは中学2年時に学習済みの作品である。内容については既に理解できていることを前提に学習を行った。この作品のタイトルが「走れメロス」ではなく「もし、〇〇だったら」と問いかけ、自分たちでタイトルを考えさせた。その際、既習の物語である「大人になれなかった弟たちに…」 「麦わら帽子」などのタイトル例をあげながら、省略の効果や、タイトルの象徴性に気付かせた。

・第2回 「関係づけて意味をつくろう」—第2次第4時—（A-2）

ここでは、「走れメロス」の冒頭の文章を読み、行動と心情を関係づけながら、登場人物の性格を意味づけることをねらいとした。そのために、まず、冒頭の文章で、行動と心情がわかる場所にそれぞれマークさせ、次に、メロス以外の登場人物（王・セリヌンティウス）に目を向けさせ、同じように行動と心情を関係させて、性格を意味づけた。そして、情報（行動・心情）を関係づけた読みの効果について、意見交流を行わせた。

・第3回 「体験に照らして意味づけよう」—第2次第5時—（D-1）

ここでは、体験に照らして王の言動や気持ちを意味づけようとした。まず、王がメロ

スに対して挑発的な言動をとる場面をもとに、その言動に対して共感の立場か否か決めさせた。次に、スキルアップシートに、共感する・しないの立場に分かれて考えを書かせた。そのとき、体験に重ね合わせるように「私だったら」という考えを入れながら書くよう指示し、王の言動についての意見を、自分と違う立場の友だちとディスカッションさせた。そして、体験に基づいて作品の意味を自分なりに作っていくことは個性的で説得力のある解釈を作ることであり、ショートショートの良いさを広告テキストに表すときにも生かせることに気付かせた。

・第4回 「『落ち』の効果について考えよう」—第2次第6時— (B-2)

「走れメロス」の最後の部分の『落ち』の効果について考えさせた。困難を乗り越えた後の幸せなひとときやメロスの意外な一面を出しているなどの効果が指摘された。さらに、友だちとペアで対話させることで「和み・平和」「人間らしい偉大なメロス」などの意見も現れた。最後に今日の学習のポイントとして、落ちの効果を「それまでの印象や雰囲気を変えよう」とか「物語の印象をさらに高める効果」とまとめた。

・第5回 「文体の特徴から効果を見抜こう」—第2次第7時— (B-2)

ここでは、文体の特徴が生み出す効果をつかむために、「走れメロス」と「大人になれなかった弟たちに…」を読み比べ、効果を考えさせた。そして、一文の長さ・文語調（ならぬ）・命令形などの断定的表現などの効果について意見を出し合った。最後に、第3次の学習への橋渡しの意味もかねて、「走れメロス」の文体の効果を伝えるつもりで「走れメロス」の広告テキストをためしに書かせた。生徒は次のような広告テキストを書いていた。<正義・真実・友情…。メロスは走る、友のもとへ。><友情を守るために走り続けるメロス！リズムカルかつ緊迫感を持って繰り広げられる展開に、驚きと真実の大切さを気づかせてくれる力強い作品です。>

第3次 読書サークル実施段階

1. 読書サークルについてのイメージを持たせる—第3次第1時—

読書サークルVTRを視聴させ、自分がどの役割に関心があるか確認させた。その上で5人グループでそれぞれ役割分担を決めさせた。また、ショートショートでの読書サークルをイメージしやすいように役割ごとに生徒を集めて分担シートを用いながらやり方を説明した。

2. 各グループで紹介したいショートショートを1つ選ぶ。—第3次第2時—

今回ショートショート集でテキストに選定した『ポツコちゃん』（星新一）は、約50の小話が掲載されており、生徒はそれぞれ好きな作品をもっている。そこで、各自の読みの分析から見た小話の面白さや、それを広告テキストに生かしたイメージを意見交流させながら、各グループで紹介したいショートショートを1つ選定させた。

3. 役割分担シートを個人で書く。—第3次第3時—

読書サークルでのディスカッションを豊かなものにするために、事前の役割分担シートの記入によってそれぞれ別の視点から作品を読み込ませておく。また、グループでのディスカッションの時に、自分の役割に応じてどんな話題が出せそうか、広告テキスト表現に生かせるどんなアイデアが出せそうかを書かせておく。

<生徒の役割分担シートの記述例（言葉担当者）>

- ・今起きている事件とこの物語を照らし合わせてみたらいい。テポドンとかイラクとか＝自己中心的なところがある。そしたら大人の心をつかめる！
- ・昔と今の科学の進歩を物語の表現から照らし合わせる。人や時代が変わっても変わら

ないものをアピールする。

4. 読書サークル「選んだショートショートを分析する」—第3次第4時—

以下に読書サークルでのディスカッションの様子を示す。それぞれの役割に応じて作品の特徴をアピールするためのアイデアを出し合っている様子がわかる。

＜読書サークルでのディスカッションの様子

(話題提供) 非現実な話だよな！？その面白さを現代の冷めた人たちに気付かせるのは難しい…

(進行役) 「言葉担当」さん。なにか意見がある？はじめと最後のギャップについて語ってたよね。

(言葉担当) 「便利さに埋もれている」という表現が多い。登場人物はジコチューなのに「機械に使われている」、そこをアピールすれば、今の現代人や大人の心がつかみやすい。

(セールス) そうね。わたしもはじめは、非現実的にとらえがちだったけど、今の地球に重ねた比喩表現もあるので、そこを尊重すべきだと思う。

(批評家) 非現実なところは、少しでも現実的なものになるように、普段の生活と結びつけた方がいい。また、人類の心の変貌についてもっとわかりやすい解説があるといいと思う。＞

5. 日誌に記入する

日々の話し合いの様子や感想を次のような項目で日誌に書かせる。①「今日の話し合いについて」(ディスカッションの見通しや手順を意識させるため)、②「今日の話し合いの内容」(教師が進捗状況やつまづきをとらえるため)、③「話し合いの成果」④よかった点や今後の課題を明確にさせる「今日のサークルのディスカッションを振り返って」である。

第4次 広告テキストをつくる

ショートショートの分析を終え、その分析を生かして広告テキストを作成する。各グループが選んだショートショートを薦める広告テキストの表現を協同で考える活動である。各グループに小ホワイトボードを配布し、広告テキストのイメージを自由に書かせるていった。しかし、読みは分析できても、なかなかそれを端的な広告テキストとして表現できない難しさを生徒は感じていた。ここでは、教師のさらに細かい手だてが必要であった。

7 生徒は何を学んだか

・「本を読んで感じるおもしろさの中身を説明できるようになった。」

この言葉は、単元終了時に実施したアンケート調査(7月14日・二組80名分・調査結果は論文末にまとめて掲載している。)の中の記述例である。この単元の成果の一端はこれに代表される。つまり、読解ストラテジーを取り出した学習が、単元二次以降の、自分で選んだ作品のおもしろさを分析する学習へ連動していき、活用されていくことで、生徒に効果が実感されていることがわかる。ただし、読解ストラテジーを取り出して学習することは、与えられたストラテジーを理解し、練習して獲得させるものであるため、生徒の理解度を上げ、能動性や意欲を引き出すために学習活動内容を焦点化したものにしたたり、既習テキストを使ったり、生徒の活動中心のものにするなどの工夫が必要である。

・コミュニケーションスキル学習の効果

武田教諭との協議の中で、武田教諭が最もクラスのよい効果を感じたのがこのコミュニケーション学習を通しての生徒の変化であった。コミュニケーション学習は、一時間であったが、ここで生徒と確認した「ディスカッションの指針」を読解ストラテジー学習の中で絶えず意識づけていくことで、生徒自身が指針に沿って話し合う心地よさに気付いていたのである。生徒達の実際の姿を学習材（ビデオ・シナリオの役）にしたことも効果的であった。エピソード1のようなやりとりがお互いの理解を深め、教室の雰囲気を持地的な明るいものにしていったことに貢献している。コミュニケーションスキル学習は国語の授業のみならず、教室の学習の雰囲気全般をよいものにする効果があったことも武田教諭は実感している。

・コミュニケーションスキル学習と読解ストラテジー学習を連動させたことの効果

コミュニケーションスキル学習を行い、その後の読解ストラテジー学習で絶えず「ディスカッションの指針」（協力的な姿勢で話し合うこと等の指針）を意識させたことで、アンケート質問項目1の（ウ）のアンダーライン例、質問項目2の（イ）・（カ）・（コ）のような効果を捉えた反応が現れた。話し合いの形態を取る学習をする際には、話し合い方に関する学習を有機的に連動させるのが効果的であることを確認できた。

・「読書サークル」の形態を取ったことについて

これについては、これのみを問うた質問項目を設けなかったため生徒の意識を明確に捉えにくいのが、質問項目4において、「様々な視点をもって一つのを分析するということ」（そういう読み方や対処の仕方があるのだということ）「役割があることで生じる責任感」を挙げたものがいた。期待していた効果（それぞれの役割による特定の観点からの解釈を持っていることで多様な意見が生まれる等）を記述するものはなかったが、これについては個々の読書サークルにおける生徒の発話分析が必要であると考えられる。

・今後の課題

このアンケートや武田教諭との協議によって、「読書サークル」を活用した本研究実践を、より目的にかなったものにするための改善点について次のように確認した。

- ・読解ストラテジー学習を通じて獲得したものを、別のテキストで活用させることはある程度できたが、活用して読みとったものを表現物に再構成する段階にはさらに指導者の手助けが必要であった。表現へ結実させる方途を授けるための読解ストラテジー学習の開発が必要である。
- ・読解ストラテジーをさらに整備するための基本方針として、単元のゴールに用意した生活に必要な読み方として何が必要かということからボトムアップして拾い出していきたいと考える。その方が学習に対して実効感を持ちやすく、それが学習への意欲につながっていくからである。
- ・話す聞く領域の指導を双方向的な対話・話し合いの指導として、また、コミュニケーション能力の指導として一体化して捉えてきたが、それだけではなく、読解力の学習と連動させて指導することの相乗効果を確認できた。このような領域統合的な国語学習のあり方について、読書サークルの発想を手がかりにさらに実践を通して考究していきたい。
- ・読書サークル活動時の教師の指導の仕方についてよりよい方法を考案する必要がある。教師は生徒の読書サークルの活動状況を観察することによって、次に取り出して学習しなければならない読解スキルやディスカッションスキルを教師が把握するべきで

あったが、8グループ同時進行の中でそれが十分にできなかった。そのため、ディスカッションの焦点が明確でないグループがあった。日誌に記録された内容も手がかりにしながら、読書サークル活動時にどう教師が効果的に指導ができるかを追求する必要がある。

「読書サークルは」同じメンバーで継続して行うことによる洗練と習熟をねらいとしている。そのため、武田学級ではこの単元後も「読書サークル」を活用した別の単元が続いていく。今後求められる、「社会生活に生きる読解力」を育てるために、生徒の主体的読解活動を中心とした授業をさらに具体化していきたい。

アンケート集計 () 内の数字はその内容を書いた記述の数を示す。総数127

質問項目1；読解ストラテジーアップシートで学んだことを書いてください 総数127例

(ア) 一般化, 概括的表現 (41/127)

例：様々な視点で読む読み方 (23), 登場人物の気持ちを読みとることができるようになった (8), 作者・筆者の思いを読みとる学習 (2), 本を読むのが好きになった (4), おもしろさの中身を説明できるようになった (2), 不確かな一般化 (2)

(イ) 読解ストラテジー学習での学習内容を直接記述したもの (67/127)

例：タイトルの効果 (17), 落ちの効果 (11), 文体・ジャンル (8), 体験に照らして読む (9), 場面等を関連づけて読むのが大切 (5), 登場人物の心情・行動を関係づけて性格を読む (12), メロスとセリヌンティオスの心情の変化を心情曲線で読みとるとよくわかった (5)。

(ウ) 学習方法が良かったことについて言及したもの (8/127)

例：友達と考えを交流することによって自分の考えが深まることを知った (4), スキルアップシートという形で学習をポイント化することの効果 (2), 既習学習材 (走れメロス) を使うことの効果 (1), 小グループ学習なので気楽に言えて自信がついた (1)

(エ) これからの読みの学習へ転用できるものを学んだことを自覚した記述 (9/127)

(オ) 日頃の自分の読書生活についての認識が深まったことを自覚した記述 (1/127)

(カ) 記入なし (1/127)

質問項目2；コミュニケーションスキルアップシートで学んだことを書いてください 総数71事例

(ア) 一般化, 概括的記述 (10/71)

例：うまく話し合うための手順, 効率よい方法, 気をつけなければならぬこと

(イ) 考えを交流すると意見が深まるということ (22/71)

例：友達と話し合いながらだと自分では考えなかったことなどが分かり, とても役に立ちました。一人の意見だと偏った考え方しかできなかったけれど, 4人で, 2人で意見を乗せていきながら大きくしていくのが楽しかったです。

(ウ) 具体的なコミュニケーションスキルを挙げたもの (12/71)

例：前の人と意見が正反対でも気にしない, または質問する。頷いたりなどのリアクションをとる。

その人の意見に対する自分の意見を考える。人の意見を大切にする。

(エ) 協同性を発揮することの大切さ (5/71)

例：発表しないよりもした方が考えが深まるのだということを学びました。話し合いをする中で意見を言う人と聞く人との関係を保たなければならないことも知りました。話し合いではリアクションをとること、反対意見を受け容れることなどがポイント。

(オ) 話し合いにおいて役割を自覚することの大切さ (5 / 71)

例：今までギャーギャーザワザワと進めていた話し合いがずっと分かりやすいものとなった。話し合いは司会者だけがしっかりとしていればよいと思っていたのだが、この学習で周りの人もしっかりとしていないといけないというのに気がついた。

(カ) 他の生活場面・学習場面で生かせるものを学んだ (4 / 71)

例：会話の仕方を学んだ。今後はもちろんだが読解ストラテジーアップで毎回行う会話の参考になった。ただこの授業のための話し合いだけでなく他の時の話し合いでも生かせそうだ。

(キ) シナリオ形式で学んだことの効果 (6 / 71)

例：実際に話し合いをしている場面を考えながらすることでどうすればよいかわかりやすかった。自分の経験から大切なことを探し出したのが良かった。

(ク) 事前に話し合いについて学習し、共通理解して実際の話し合いに臨んだことの効果 (3 / 71)

(ケ) 自分の変化 (3 / 71)

例：冷静に考えて話し合いができるようになった。話し合いを2回目3回目とすることで自分から積極的に話せるようになった。

(コ) クラスのコミュニケーション状況の向上を感じているもの (1 / 71)

生徒たちで作る話し合いの仕方が分かりました。みんなが指示されずに進んで意見を言っていくクラスの雰囲気作りも学ぶことができました。またそれについて意見交換することで今までの話し合いもとってもスムーズに意見交換ができたと思います。

質問項目4；単元「広告テキストを作ろう」での印象や学んだことを書いてください。
(「読書サークル」について言及したもののみ掲載した)

立場を決めていろいろな視点から見ることを学んだ。考えを話し合う時にどのような役割を持ってすればいいか学ぶことができた。ただ話し合うだけでなく、批評家(私の場合)という立場から意見を言うことでよりよい広告テキストを作ることができた。一人一人の立場を変えて話し合うことで様々な点から見落とすことなく意見ができる。一人一人に役割が与えられることで、責任感も生まれ、より充実した話し合いができるようになった。一人一人に役を与えて出し合ってみてそれぞれ自分の役にあった説明ができたのでよかった。様々な視点から一つのことを探ったりすること。役割を決めたことで自分の意見に筋道を立てて話すことができたと思う。

*1 『PISA 2003年調査 評価の枠組み』国立教育政策研究所 ぎょうせい2004 5

*2 『国語科重要用語300の基礎知識』大槻和夫編 2001 明治図書

*3 『「読解力」とは何か PISA調査における「読解力(リーディングリテラシー)を核

としたカリキュラムマネジメント』横浜国立大学教育人間科学部附属横浜中学校 FY
プロジェクト編 2006年 3 三省堂

*4 Daniels,Harvey：『リテラチャーサークル』の著者。シカゴのナショナルルイス大学の
「読むこと言語及び学際研究」教授。

*5 山元隆春「リテラチャーサークル実践に関する一考察－Moving Toward with
Literature Circles（2002）の検討を通して－」『教育学研究紀要』49 pp,39－52

*6 足立幸子「リテラチャー・サークルーアメリカの公立学校におけるディスカッショ
ン・グループによる読書指導法」『山形大学教育実践研究』13 pp,9－18 2004

*7 Jeni Pollack Day：ニューヨーク州立大学の「読むことの教育」の博士号学位取得希望
者。ボストンの公立学校教師